統計雑感（その2）

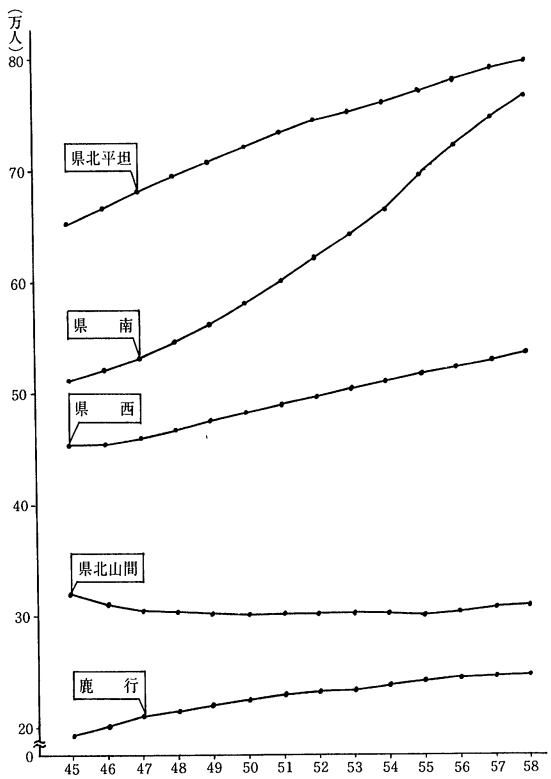
まだデータが固まっていない時点ではあるが，昨年の昭和58年は，人口の伸びが最も停滞をした年になりそうである。人口の伸びる要因は次の４つに集約されよう。

① 出生が増えること
② 死亡が減ること
③ 県外からの転入者が増えること
④ 県外への転出者が減ること

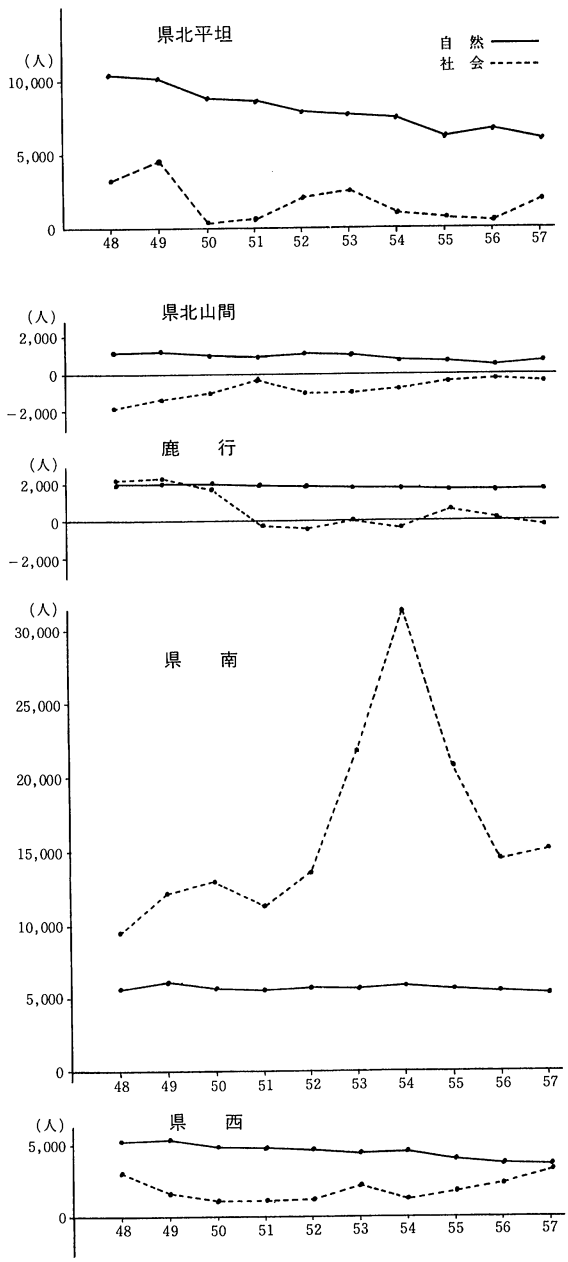
そして①と②の差が自然増減であり，③と④の差が社会増減，自然増減と社会増減の差が人口増減ということになる。この中でどの要因が大きく働いたかを，過去10年の推移をもとに地域の段階までおろして詳しく掘り下げてみてみよう。

図―１は，各地域の人口増減の推移である。10年前は県北平坦が全体の３分の１で最も大きく，県南，県西が少し離れて続き，県北山間が県北平坦の半分，鹿行がほぼ１割といったところであった。その後の10年間で県北山間が減り，鹿行が増えてその差が縮まり，県南が県西を離れて県北平坦に年々近づき，あと２年もたてば県北平坦を追い越すかにみえる。大まかに分けてみると，全体を10とした場

図―１　地域別人口の推移



図―２　地域別社会増と自然増



県企画部統計課長　高　倉　　修

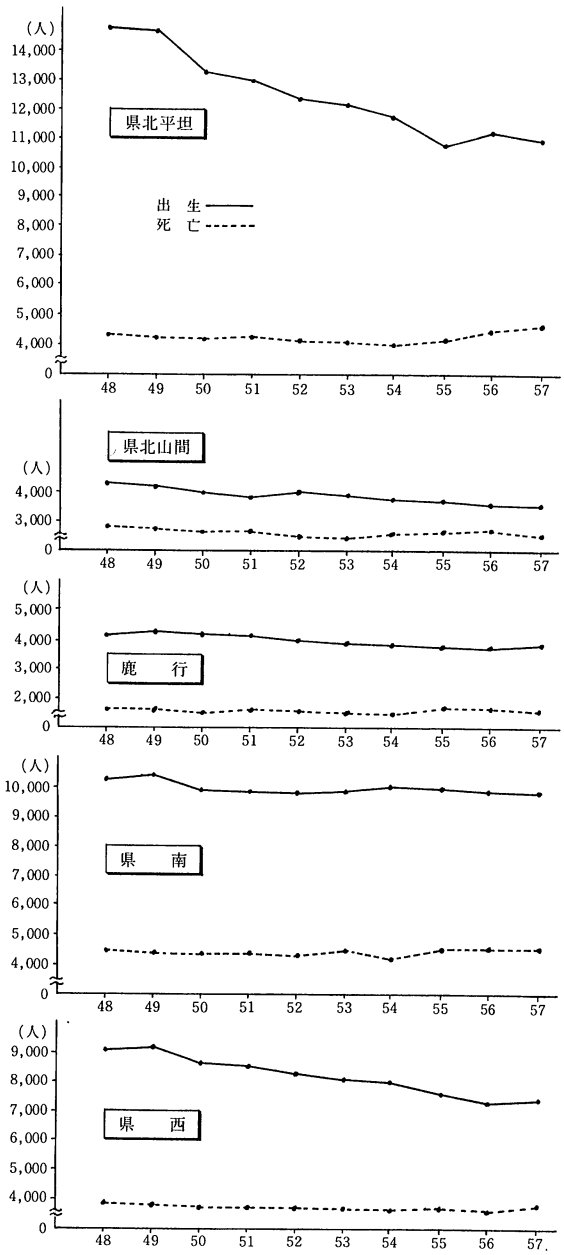
合，県北平坦と県南がそれぞれ3，県西が2，県北山間と鹿行がそれぞれ1となっている。

図―2で自然増減と社会増減の推移をみると，県北平坦の自然増の低下と，県南の社会増のピークが目立つ。県北平坦の自然増の低下は4割減にも達している。これによく似ているのが県西で，規模は小さいながらも同様に低下している。これに対して県南の自然増はほとんど動きがみられない。社会増が自然増より大きいのは県南だけであるが，そのピークは54年を中心とした3年間に特に顕著である。県北山間と，鹿行の1時期に社会減がみられるが年々小さくなってきている。県北平坦と県西の社会増は50年と54年頃に谷があるが近年は上向きを示している。

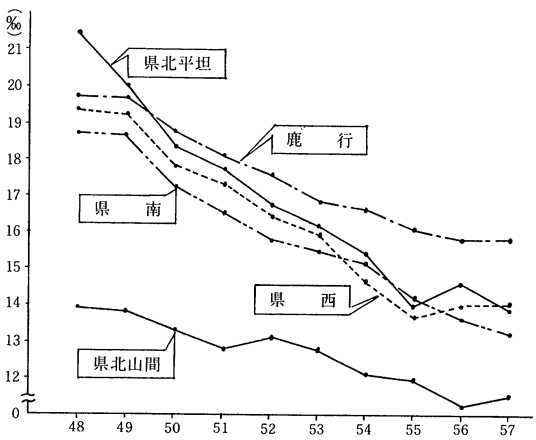
図―3は自然増減の要因である出生と死亡の推移を示している。死亡(点線)の推移はそれ程目立った動きはない。

県北平坦と県西の自然増の低下が出生の低下に起因していることが判る。と同時に県南の変化のなさが相対的には，

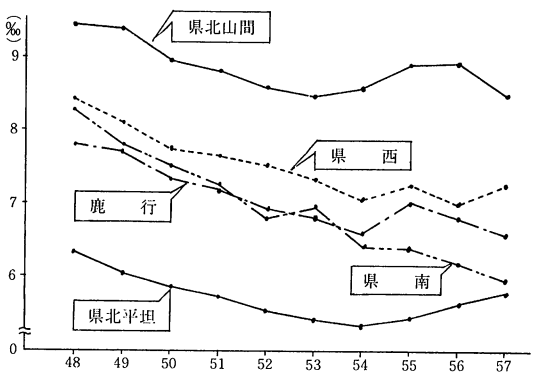
図―3　地域別出生と死亡



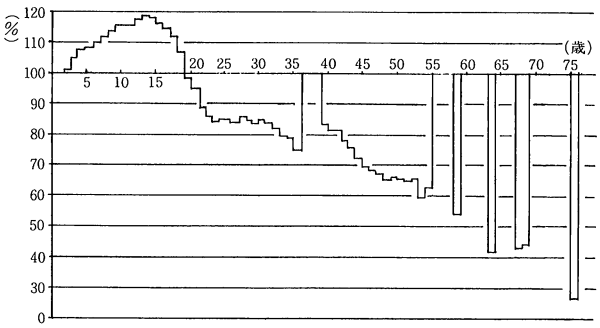
図―4　地域別出生率の推移



地域別死亡率の推移



図－5

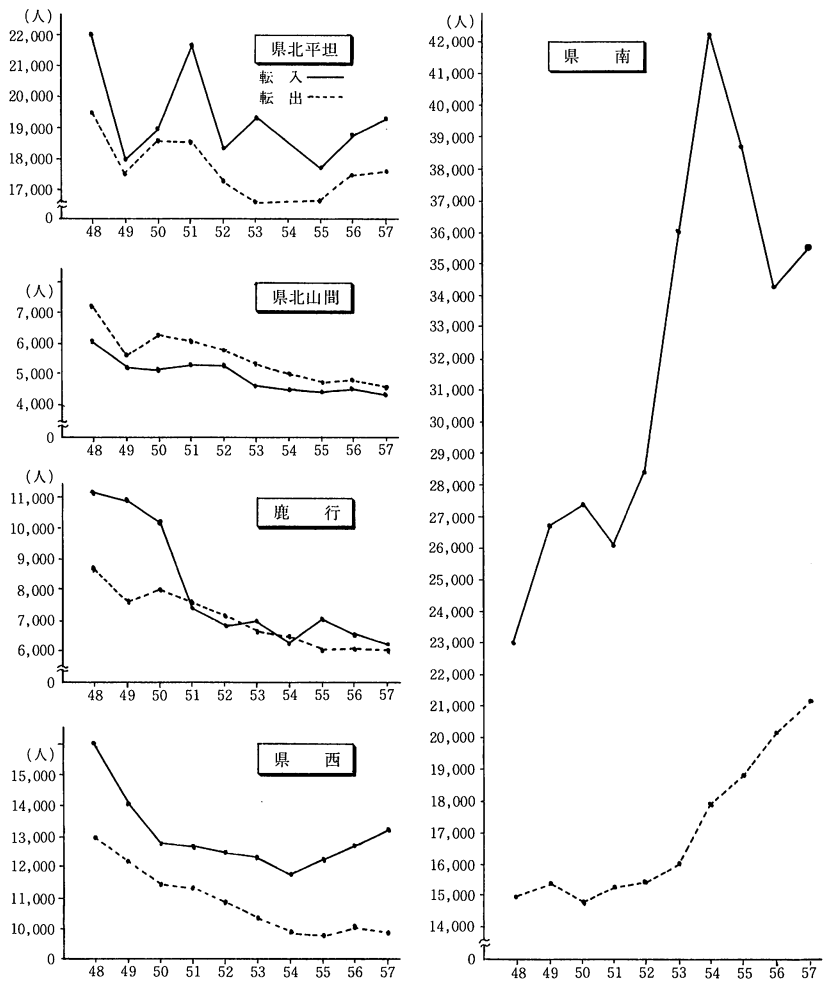


人口と，厚生省の人口動態統計の毎年の出生数をとりだして比べてみた。もちろん厳密な意味での比較は無理であるが，ひのえうまの年の谷をあわせて，比較をしてみたものが図－5である。ここでは人口動態統計の出生数を100%として，常住人口の各歳人口(58年1月1日現在)がどのような関係になっているかを示している。かりに本県で生まれた人が転出も死亡もせず，転入もなかったとすれば，どの年齢をとっても100%になるはずである。そこでこのグラフをみる限り19歳以後の低下は若干の転入はあるものの，転出をあらわしているとみてよく50歳以後は死亡も加味されて出生の増を示しているとみるのは無理であろうか。ただ県北平坦と県西に近年死亡の増がみられるのは如何なる現象なのであろうか。

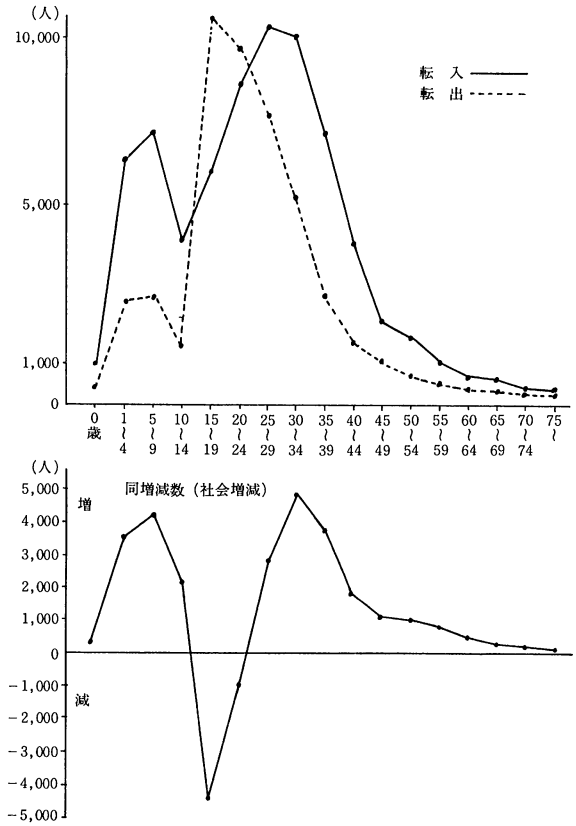
図－4は出生率と死亡率の推移をあらわしたものである。実数の推移だけでは判らなかったことが浮かびあがってきているように思う。出生率・死亡率とも年々減少してきている現象は全国的なものであるが，その中で出生率の最も高い地域は鹿行であり低い地域は県北山間であった。また死亡率の最も高い地域は県北山間であり低い地域は県北平坦となっている。県北山間についてはやはりという感じであるが，鹿行の出生率，県北平坦の死亡率の高さは意外であった。そして県北平坦と県西の実数における近年の死亡の増加傾向は率においてもほぼ同様な動きがみられる。

出生数の増減傾向は1月号の人口ピラミッドのところで述べた如く戦後のベビー・ブームが作った2つの山とその間にある谷が基線となるであろう。そこで人口ピラミッドの基礎となった年齢各歳別

図－6　地域別県外転出と転入



図―7　54.10～55.9の間の5歳階級別，他県転出・入人口



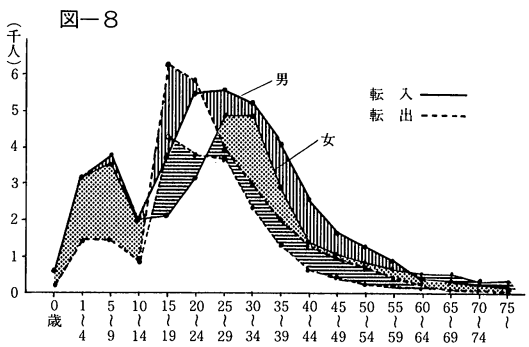
いるであろう。よく地元民とか新住民などという言葉が使われることがあるが私自身は何かひっかかる言葉である。もっといい表現はないものであろうか。それはともかく，このグラフでは19歳未満について，最高(13～14歳)で18%近くの他県で生まれた子供さんがいることになっている。これは転入者の家族とみてよいのではなかろうか。

図―6は県外との転入・転出人口の推移を示したものである。やはり県南の転入は大変大きなピークを示している。と同時に53～54年頃から転出も伸び始めてきている。県西は10年前は相当な転入があったのであるが年々落ちこんで，54年に最低となり，近年再び伸び始めている。鹿行の場合も8年前までは相当な転入があったのであるが以後低下を続けている。県北山間は転出が転入を毎年上回ってきた地域であるが，転出も転入も共に動きが少なくなってきている。

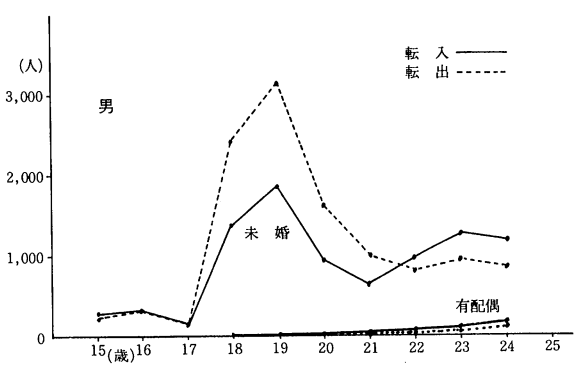
県北平坦は48年と51年にピークがあったが55年を谷として近年伸びてきている。以上みてきて，転出と転入が寄り沿って変化する場合と，無関係に変化する場合とがあるように思われる。転出・転入者が年齢別には握できれば，その辺のことが，ある程度説明がつけられるかもしれない。

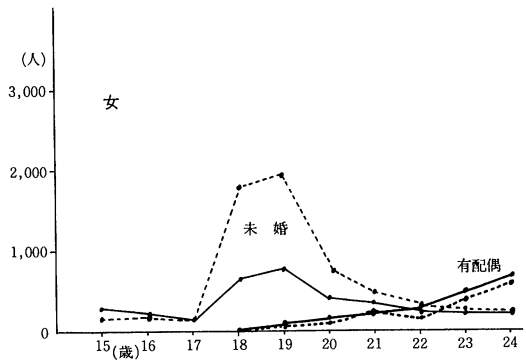
55年の国勢調査報告第6巻，人口移動集計結果(その1)から県1本ではあるが，次のようなグラフを得ることができた(図―7)。このグラフは54年の10月から55年の9月までの1年間の転出・転入人口が年齢5歳階級で示されている。この期間はちょうど県南で社会増がピークを迎えていた後半に属していることを念頭においてみなければなるまい。14歳以下では転入が転出の2倍以上になっており，社会増の山は，図―5の山に符合する。即ち，転出者の家族も相当含まれていたことを裏付けるものであろう。15～19歳で転出のピークがあり，転入のピークは25～34歳にできている。転出のピークは主に進学によるものであろうし，転入のピークは主として移住によるものであろう。その結果15～19歳では社会減の谷となり20～24歳でも社会減，社会増のピークは30～34歳にあらわれてくる。35～39歳も社会増が大きいことがうかがえる。それを更に男女別にみたらどのようになるであろうか。図―8をみて頂きたい。15歳未満については，転入・転出とも男女ほぼ同数であるが15～19歳では6：4の割で男の転出が多く，転入では女は男の半分となっている。20～24歳も転入より転出が多くなっているがその差は少ない。25～29歳では男の転出は大きく減るが女はそれほどでなく，女の転入が大きく伸びる。男の転入のピークは20～34歳まで続くが女の転入は，25～34歳でピークをなしている。35～39歳以後は男女とも転出・転入

図―8



図―9





は徐々に低下している。15～24歳については各歳の集計がしてあるので，これもグラフ化してみた(図―9)。男は19歳をピークに18歳から21歳にかけて転出が大きく，同時に3分の2ほどの転入がある。そして22歳以後転出よりも転入が大きくなっている。女は18，19歳をピークにやはり転出が多く転入はその半分に満たない。また男のように以後の転入の増はみられない。ただ有配偶の転入が転出を上回って伸び始めている。男女別の社会増では女が30～34歳にピークがあるのは興味深い。

出産をした母の年齢分布は，人口動態統計にある。参考までにこれをグラフにしてみた(図―10)。

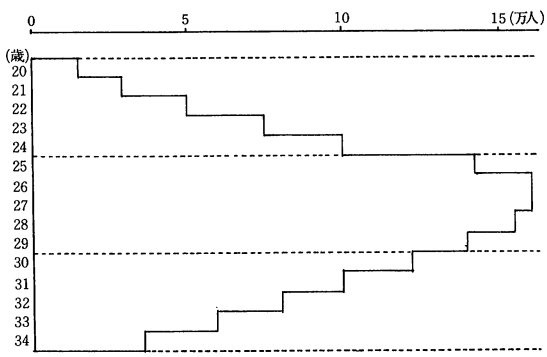
地域別の年齢構成はどうなっているのだろうか。特化グラフを作ってみた。これは全県の5歳階級の構成比を1として各地域の構成比がどのような位置にあるかをみたものである。県北平坦では49歳以下において構成比が高く特に25歳から39歳までの男に厚い層がみられる。半面50歳以上の構成比は低くなっている。女では20～24歳と40～45歳に構成比が高くなっている。県北山間は，想像通り50歳以後の高齢者に男女とも高い構成比が認められる。これに対して44歳以下においては著しく構成比が低くなっている。ただ15～19歳だけがわずかではあるが男女とも構成比が県平均を上回っている。これは如何なる理由によるものであろうか。出産機会の多い25～29歳の女性が少ないことから，0歳から14歳が低くなっているのはうなずける。

鹿行は25歳～30歳において構成比が高くなっており，特に25～29歳の女性が高いことから0～4歳にも高い構成比があらわれている。このことは鹿行の出生率の高さを裏付けているように思われる。若い世代が比較的多い地域と言うことができよう。県南では20～24歳の男と35～44歳の男と30～44歳の女子の構成比が高いことがうかがえる。鹿行と違って30～34歳の女性の高さとそれから25年を差し引いた5～9歳の子供が高いのは面白い相関ではなかろうか。20～24歳の男子というのは筑波大学等の影響であろうか。相対的に50歳以後の高齢者の構成比は低くなっている。

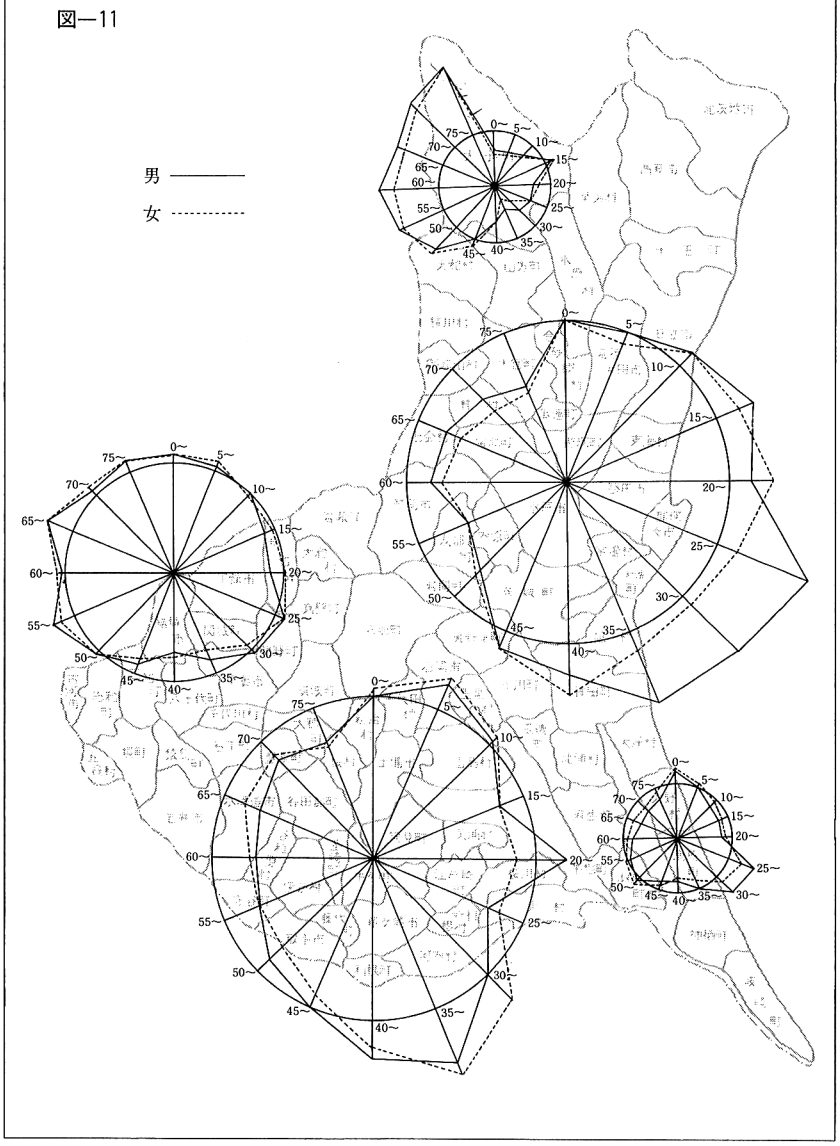
県西は県平均に近い構成比となっている。55～59歳と65～69歳の男女の構成比が高く40～44歳が特に低い。25～29歳と0～4歳との関係もよくでている。35～49歳の壮年層に構成比の低さが目立っている反面，鹿行とよく似た若い世代がいる地域といえるであろう。

人口をめぐって，色々なグラフを書いてきたが，まだまだ上っつらをなでたような，隔靴掻痒の感をぬぐいえない。

図―10　出産した母の年齢分布



図―11



しかし本県の人口がどのように動いていき，今後どうなるかを考える上でいくらかの足しにはなったかと思う。人口予測といえば，難解な高等数学を駆使して求めるものという常識ともいっていいものがある。また不謹慎な話ではあるが，予測は当らないものと割り切る人もいよう。統計表の使い方は人によって様々であり，これが１番いいというものはないのではなかろうか。私自身とことんやってみようかと，意気ごんでみたものの，砂漠の中に迷いこんでしまったようだ。グラフが機械で簡単に作れたらとつくづく思う。統計は現実を認識するためには欠くことのできないものである。それだけに見て判るグラフはもっともっと多くの人によって作られ，お互いに教えあう必要があるのではなかろうか。

人口について書いたグラフはまだまだあるが誌面の都合で割愛した。何とか役立てる方法を考えてみたい。